

父よ、あなたをほめたたえます

マタイ 11 : 25



司祭 ヨハネ 井田 泉

2017 年 7 月 9 日
聖霊降臨後第 5 主日

奈良基督教会にて

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。』」 マタイ 11:25

今日の福音書の冒頭で、このようにイエスは祈っておられます。その祈りは賛美の祈りです。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます」

このとき、イエスさまはどのような表情をしておられたのでしょうか。聖書には直接書かれてはいません。だいたい聖書を読むとき、わたしたちはイエスさまの表情を考えたり思い浮かべたりすることがあるでしょうか。でも今はあえて想像してみます。そのときのイエスさまの表情は？ 目は開けておられたか閉じておられたか。手は組んでおられたか合わせておられたか。それとも両手を上げておられたか。何も書かれていないのですから、唯一の正しい答えはなく、どう想像したとしても誤りではありません。

けれどもわたしはこのように想像します。イエスは喜びに満ちてほほえんでおられた。場所は戸外で、目は開いて天に注がれていた。両手は開いて上に向けられていた。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます」

と訳されていますが、原文ではまず

「ほめたたえます、あなたを」

から始まります。その後に神への呼びかけの言葉が続くのです。

「父よ、天地の主よ」

なぜそういう順序かというと、このとき急にイエスの内側から、喜びと神への賛美がほとばしり出たからです。

あらためて祈ろうとしてまず父なる神に呼びかけて、その後に祈りの内容が続く、という普通の順序ではありませんでした。

「ほめたたえます、あなたを。父よ、天地の主よ……」

今ご自身が何かに出会われた、経験された。それに感動して、喜びと賛美の祈りがほとばしり出た。そして神への呼びかけが続いたのです。

何があったのでしょうか。そこまでイエスが喜ばれたのは何なのでしょう。具体的には書かれていないのですが、イエスのその賛美の祈りの続きを聞きましょう。

「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました」

「これらのこと」が何かわかりませんが、もっとも大事なことに違いありません。神はそのまま大事なことを「知恵あ

る者や賢い者には隠して」。知恵、学識、力、社会的立場や名声を持った立派な人たちには、神はそれを隠された。そしてそのもっとも大事なことを「幼子のような者に」お示しになった。

「幼子のような者」でもいいのですが、本来は単純に「幼子」を意味する「ネーピオス」(νήπιος)という言葉が使われています。

神さまが何かとてもとても大事なことを幼子に示された。それを幼子に与えられた。幼子の中に神さまの賜物、神さまの愛の働きがはっきり存在する。それに今、イエスは触れて、感動して、思わず喜びと賛美の声を挙げられた。

「ほめたたえます、あなたを。父よ、天地の主よ……」

イエスの表情は喜びに輝き、神への感謝と賛美に溢れました。

ところでその直前、今日の箇所の前 11 章 24 節まで、実はイエスの表情は悲しみと怒りに曇り、こわばっていました。

「16 今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

17 『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

葬式の歌をうたったのに、

悲しんでくれなかった。』」マタイ 11:16-17

イエスは神の国の訪れを伝え、神の愛の働きを示されたのに、冷たい反応しか返って来ませんでした。世と人の悲しみを共にして嘆かれたのに、無関心の壁が立ちはだかつていました。

コラジン、ベトサイダ、カファルナウム——これらガリラヤの町々で人々を招かれたのに、傲慢な人々は耳を貸そうとせず、自分たちの力を誇り、過ちを認めるどころかかたくなに居直るような態度を続けています。これに対してイエスは、神の裁きを告げざるを得ませんでした。

愛の呼びかけと働きかけに対して、返ってきたのは無関心と傲慢と反抗。イエスは人々を愛されるからこそ、悲しみと憤りに耐えなければならなかったのです。

そうした中で、幼子の中に働く神の愛に、思いがけずに触れたとき、イエスのうちから感動と賛美の祈りがほとぼしり出たのが、今日の箇所です。

先週の木曜日から金曜日にかけて、親愛幼稚園の年長のお泊まりキャンプがありました。40人近くの子どもたちが幼稚園の中で1泊2日を過ごしたのですが、その中でわたしは驚きと感謝をおぼえることがありました。大きなことではなく、小さなことなのですが……。

礼拝堂で1日目は開会の礼拝、2日目は朝の礼拝を礼拝堂に

集まってしました。

普段の礼拝堂での礼拝の流れとほぼ同じで、短い聖書の言葉を一緒に唱えた後、わたしがベルを3回鳴らします。普段はその後、わたしが定式の祈りをし、それを子どもたちが繰り返します。そのいくつかの祈りが終わるとわたしが聖書のお話をすることになるのです。

けれども今回は、ベルを鳴らした後、定式の祈りは省くことにしていました。

ところが今回、わたしがベルを鳴らして、お話しを始めようとすると、子どもたちはいつものようにお祈りをしようとして目を閉じて、真剣に手を組み合わせて待っているのです。子どもたちの中にこのように祈ることの気持ちと姿勢が培われていることに驚き、深く感謝の思いを持ちました。

イエスが感動して喜びの賛美の祈りを思わず口にされたのは、幼い者たちのうちに与えられ、示されている神の愛と真心の祈りに触れられたからではないでしょうか。

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。』」

神さまはわたしたちに愛を注ぎ、神の真理を悟らせ、真心の祈りわたしたちのうちに育もうとしておられます。けれどもそれを妨げるものがあります。それは、謙遜でない知恵と知識、自分を誇る賢さです。もしそれらがわたしのうちにあるなら、それを捨ててしまいたい。たくさんの知識を得て賢くなったとしても、それによって神からのもっと大切なものが見えなくなったとしたら不幸です。

しかし神さまのもっとも大切なものを知るためであれば、心を低くして謙遜に、そして熱心に学ぶことをしたいと願います。

神さま、わたしたちを幼子のようにして、ほんとうに大切なものを知り、経験できるようにしてください。神さまがわたしたちのうちに働いていてくださることに触れて喜ぶわたしたちにしてください。あなたがわたしたちを、祈ること、賛美することにおいて、育んでくださいますように。主イエス・キリストによってお願いします。アーメン